偉人の人生をのぞ<mark>いてみれば</mark>

GREAT LIF

vol. 5

葛飾北斎

*** Katsushika Hokusai

「真の絵師」を目指し 進化を止めなかった90年

横山大観・90歳、ピカソ・92歳、熊谷守一・97歳と 画家には長寿が少なくないが、平均寿命およそ50歳の 時代の90歳となると希少性が際立つ。同時代の人々の 2倍近く長生きした葛飾北斎は、与えられし命の時間を 一体どのように過ごしたのだろうか。

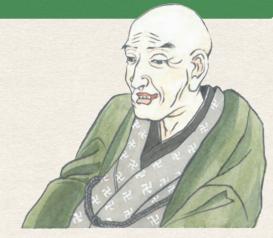
▶▶▶物心ついた頃に早くも習慣化

生涯に30回も名を変えたと伝えられる北斎は、江戸 時代後期にあたる1760年、現在の東京都墨田区に生ま れた。御用鏡師だった親戚の家に4歳で養子に出される も、その家に跡継ぎが生まれて生家に出戻る。将来絵師 となる片鱗は既に幼少期から見られたようで、6歳の頃 には目に映る物を描くことが習慣化していた。

12歳頃になると貸本屋で配達などを手伝ったが、暇 を見つけては貸本の挿絵で絵を学んでいたそうだから、 絵師になりたいという思いを抱いていたのかもしれない。

当時、江戸の町は色鮮やかな「錦絵」であふれていた。 従来の単色刷りの版画と異なり、錦絵は多色刷りの版画 であるため、多くの版木が必要となる。北斎は14歳頃か ら、下絵が書かれた版木を彫る彫師として働き始める。 その経験は後に絵師となった際、役立つこととなる。

北斎が人気浮世絵師だった勝川春章に弟子入りしたの は19歳の時。師匠に才能を見出され、わずか1年後に は「勝川春朗」の名をもらい、黄表紙や洒落本といった 文芸本の挿絵を任された。絵師として第一歩を踏み出し たわけだが、それを快く思わない兄弟子たちから妬まれ ることもあった。だが、北斎は彼らの態度に屈するどこ ろか、むしろ奮起する原動力とし、仕事の技術を高める べく日々研鑽に励んだ。



江戸時代の絵師。72歳で刊行した『富嶽三十六景』は斬新な構図 と色彩で、西洋の画家たちにも多大な影響を与えた。あらゆる物の 絵の描き方を収めた『北斎漫画』は今日のマンガ文化にも通じる。

▶▶▶ 天があと5年生きさせてくれたら

師匠が他界して間もなく、北斎は勝川派を離脱。以来、 どの流派にも属さず、独自の道を歩み始める。34歳の 時である。そこからは流派の垣根を超えて琳派、狩野派、 土佐派などさまざまな技法を学び、さらには西洋絵画の 遠近法も身につけた。手掛けた作品も多種多様で、美人 画、役者絵、花鳥画、妖怪画、風景画、鳥瞰図、肉筆画と あらゆるジャンルで人々を魅了する絵を描いた。

長きにわたる職業人生の中では、黄表紙や洒落本が幕府 により出版規制されたこともあった。厳しい状況におかれ ても絶え間なく仕事を確保できたのは、多彩なスタイルや 圧倒的な技術をもっていたからではないかと想像する。 長くその仕事に携わっていようとも、才能に恵まれていよう とも、慢心せず、腕を磨き続ける。新しい技術も積極的に 採り入れる。それは簡単なようで難しい。

北斎の飽くなき探求心は年齢を重ねても衰えを知らず、 70歳を過ぎて接骨医にも教えを乞うている。理由は人体 を描くために、骨格と筋肉を正しく理解したかったから。

絵師として偉業を成し遂げた北斎も家計管理は無頓着 だったようで、売れっ子でありながら借金取りに追われた こともある。1カ所に留まることも苦手で、引っ越しは 90回以上。2度の結婚でもうけた6人の子供のうち娘 1人が同じ絵師となり、身の回りの世話をした。人づき 合いが得意でないにもかかわらず、多くの門人たちから 慕われ、支えられた。1849年4月9日、90歳で他界。「天 があと5年生きさせてくれたら、真の絵師になれるのに」 ―死の間際まで情熱の炎を燃やし続け、歩みを止めず、 進化し続けた生涯だった。

(執筆/ライター 篠田りょうこ)